# 講談「大坂の陣～幸村 VS 家康」

旭堂南海

割れんばかりの拍手ありがとうございます。でまた二回も拍手をさせてしまいまして恐縮至極でございます。藤沢先生のご紹介がございましたが、講談という芸能でございまして、落語とよく似ております。着物を着まして、一応今日は文学三昧ということでございますから鳥獣戯画の模様で来たわけでございますけれどもね。ですから今京都の国立にはないわけでございます。

講談と申しますのは、文学と歴史を足して八十くらいで割ったような感じですかね。落語と違いますのは歴史の物語を口ひとつでおしゃべりするわけでございます。ところが講談は昔は講釈と申しておりました。古い川柳には『講釈師見てきたような嘘をつき』とちょっと嘘が入ります、恐れ入りますが。しかし舌は一枚しかございませんので、罪のある嘘を申し上げるわけじゃございません。行てもしませんのに三年もの間ね、「城崎温泉日帰りしておりました。」何て言うようなどっかの議員の先生（注1）がいらっしゃいましたね、で嘘がばれそうになったら「うわぁー！」という。

我々は前に釈台と言う台を置きまして、張扇というのを叩きながらおしゃべりを申し上げます。でちょっとした嘘が入ります時にはこれを一発、で大嘘が入る時にはこれを乱打する、と。こういうのでございますね。四年ぶりに呼んでいただきました尾道、本当にいいところでございます。風光明媚というのがその通りでございますね。テラシマ先生（注2）のお話にもありました志賀直哉というのがここをしばらく拠点としておったのもまあむべなるかなというところでございま

す。特に女性の方が美しいというところでござ…叩いときましょうかね。あんまり出会うてございませんので。

四年前とほぼ変わってないと思っておりましたら変わっておりましたね。駅前の本屋がなくなりましたね。あの二階に本屋があったはずなんでございますが、本屋がなくなりました。タバコ屋のお姉さんに「本屋がなくなりましたなぁ」と言いますと「駅前に本屋がないってどうよ」言われましてね、「なるほど文学三昧なのに本屋がないんだこの駅には」と思った次第でございますが。

それはさておいてちょっとした嘘が入る時に叩くというのも実は嘘でございましてね。これは場面転換あるいは皆様方はもう一番最後で長時間でお疲れでございましょう、背もたれもそっちはありましょう……となっている方が半数以上になりますとこれで「パン！」とね叩き起こしたりするという役回りもあると同時に、たまにはこうやって乱打する場合があるんですが、これは確実に次何言うか忘れてしまってる時ですね。昔はここに本を置いてその台本を読んでいたのでございます。なので藤沢先生もちゃんとおっしゃってくださってました講談は読むというんですね。ですので今日は幸村VS家康の物語を一席読ませていただきます、こう表現するわけでございます。ところが現在はもう本を置かないようになりました。

この備後あるいは芸州というところにやってまいりますと十二月ですね。ちょうど十二月の十四日。ご存じでございますね。十二月の十四日といえば総選挙（注3）でございますかね。討ち入りの日でございまして、赤穂の義士の方々の物語なども我々はよく講演するのでございますが、四十七名で討ち入ってらっしゃるんです。それを一応覚えなければならないのでございますね。四十七名ですよ？どうしてあんな多人数で討ち入ったんでしょうね。我々のことを考えるならば三人くらいで討ち入っとれば、喋りやすかったんですが、大石倉之助義男、原宗右衛門義時、間瀬久太夫正明、速水藤左ヱ門満隆、神崎与五郎則康、矢頭右衛門七教兼、大高源吾忠雄、近松勘六行重、間十次郎光興、堀部弥兵庫金丸、村松喜兵衛秀直、岡野金衛門包秀、貝賀弥左衛門友信、片岡源五右衛門高房、富森助右ヱ門正因、武林唯七隆重、奥田孫太夫重盛、矢田五郎衛門助武、勝田新左ヱ門武堯、吉田沢衛門兼定、岡島八十右衛門常樹、小野寺幸右衛門秀富、横川勘平宗利、寺坂吉右衛門信行と二十四名。裏手総大将大石主税良金、吉田忠左衛門兼亮、堀部安兵衛武備、潮田又之丞高教、小野寺十内秀和、間喜兵光延、木村岡衛門貞行、不破

数右衛門正種、前原伊助滑房、杉野十平次次房、赤植源蔵重賢、倉橋伝助武幸、磯貝十郎左衛門正久、大石瀬左衛門信清、菅谷半之丞政利、村松三太夫高直、三村次郎左衛門包常、中村勘助正辰、奥田貞右衛門行高、間孫九郎正辰、千馬三郎兵衛光忠、間新六光風、茅野和助常成とこれで四十七士になるのでござりまする。

じゃあもう今日はこれで失礼させてもらいますか、なんてね。

言えない場合もあるのでございますが、言えたところでね、社会的には何の役にも立たないのでございますが、しかしこうやって、覚えて何かをお喋りするというのはとても楽しいお仕事でございますね。各方面方面へ行かせていただきますと、そのご当地ご当地に落語とは違いまして講談というのはその歴史に縁（ゆかり）のある物語をいたしますので、何か関係のあるものはないかしら、などと探るわけでございます。

するとございましたね、拳骨和尚というのは西方寺でございましたがもちろん、講談のネタにございます。今年の大河ドラマで黒田官兵衛というのが取り上げられてございましたが、その黒田官兵衛の盟友と申しましょうか、敵対を最終的にしたと言いましょうか、戦国の大名で荒木摂津守村重という男が、最終的には籠城をしておりました伊丹（いたみ）のお城有岡城からわずかの手勢とお妾さんと茶器を持って逃げ出したと言われてございます。そうしてどこに行ったかというと、この尾道へたどり着いたと言われておりますね。尾道に時宗のお寺で西郷寺というお寺がございます。そこで逼塞をして道の糞、道糞と、こう自ら自虐的に名乗っていたと言われているのでございますが、こういうところ一つとりましても口八丁と申しますか、物語というのが展開出来得るわけなのでございますね。

例えば、どうすれば展開できるかというと、時は天正の十年六月の二日、京都西の洞院、蛸薬師というところにあった名刹の本能寺。この本能寺に旅宿をしておりましたのがてんが七部が通（注4）をおさめておりました織田平中将信長という男、四十九歳でございましたが、一生にただ一度の油断というのが出ましたが、自らの家来惟任日向守明智光秀の大群に襲われて最期は紅蓮の炎の中で「人間五十年下天の内をくらぶれば夢幻が如きなり。一度生（ひとたびしょう）をうけ、滅せぬ者のあるまじや」。命を落としたという知らせが五日後（のち）、六月の七日の夕方近くになりまして、荒木道糞摂津守村重が西郷寺でぼーっとしておりましたところ、下僕のがんさくという男が、

「旦那様、一大事でござります！」

「わしゃもうなにがあっても驚かぬわい」

「さいでございますか。只今、毛利の軍勢の方々が、本国へお引上げでござりますが、その足軽のお方にお話しを伺いましたところ、織田信長という男が明智光秀様に殺されたそうでござりまする！」

言われたときにすねんの間ぼーっとしていた荒木村重道糞だけれども、思わず西郷寺の縁側のところで立ち上がったかと思うとね、「フハアーハアーハアーハアーハアーハハハハ……わしが長生きしたわっー！」。一声出した……これ私が今勝手に言ってるだけの話なんですね。うん。かもしれない、という話でございます。

そのかもしれない以上の創作と申しますのが大坂の陣でございます。歴史の教科書などでは大坂冬の陣夏の陣と申しますのは、藤沢先生のお話にもありましたが今からちょうど四百年前の時節は今時分から起こりました。そして、年末年始を挟みまして、和睦に一旦なって、で翌年の四月の末から五月の七日八日ぐらいまでの短期決戦を夏の陣と申しまして、豊臣方というのは完全に殲滅されてしまう。根絶やしになって、徳川時代というのがこれで安泰するというお話。

これは、教科書に載っている話でございます。東京の講談の方ならこのような話をされるわけでございましょうが、私たちは大阪の講談師でございます。大阪の講談と申しますのは、アンチ・徳川、アンチ・江戸というようなところを基本スタイルに置いてるわけでございますね。なので、一番最初に難波戦記と申しまして、大坂夏の陣・冬の陣を描きました小説もどきのものが出版されるわけでございます。それによりますと、家康のことは闘将神君家康公でございまして、豊臣の奴らがまだ何かほざいてるというので、ちょっと懲らしめてやろうという、闘将神君家康公の思し召しで、数十万の大軍で冬の陣と夏の陣、大坂へ行きまして、こらっーと言うと、ごめんなさいと謝って終わったというのがまあ江戸の難波戦記、という物語なんですね。

これが恐らく大坂へやってきて、大坂の人がこう読んだといたしますね。「なんやて？　めっちゃむかつくやんけ」と。負けたことはまあ負けたんでしょうけど、ほなら、ちょっとこれをひっくり返して、大坂が勝ちという話にしてやろう。よく、ＳＦ何とかという、もしも織田信長が生きていたらとか、そういうようなものを書く小説の方々がたくさんいらっしゃいましょうが、江戸時代から我々はそういうことをやっていたわけなんでございますね。真田幸村というのを軍師に入れまして、豊臣方というのが、実は徳川家康を大いに悩ませ悩ませ最後夏の陣におきましてはですね、ここだけのお話でございますが、徳川家康を、大坂方が、

討ち取ってしまうという。そして、徳川家康は影武者がたちまして、徳川幕府は家康の偽物が治め始めたという話になっているんです。で、豊臣のお城大坂城というのが崩れ去ってしまうわけでございますが、大将の秀頼様と軍師の幸村、副軍師と言われた後藤又兵衛基次、そうそうたる方々が、大坂城の抜け穴を通りまして最後船に乗って、鹿児島まで逃れられたという。『花のようなる秀頼様を鬼のようなる真田が連れて退きも退いたり鹿児島へ』という歌が大坂の夏の陣の直後にうたわれてヒットチャートの一位になったというぐらいであります。

徳川家康というのは関ヶ原で勝利を収めたときにはもう、既に五十と九歳になっていた、もう死んでもおかしくはない歳だ。そして、二代の将軍を三男坊の秀忠に譲った！　秀忠と申しますのは、私の口から言うのも何だけれども、阿呆でありました。出来がよくなかった。と申しますのも、実証できますのが関ヶ原の合戦の頃ぼいに石田三成と家康方が戦をして、本戦の関ヶ原というところでは、午前八時一六分二五秒に戦が始まったと記されてございましたが、戦が終わりましたのが午後一二時三六分二六秒くらいでございます。ちょうど、四時間目が終わった辺りにもう戦が終わってたんですよ。半日足らずで戦が終わって家康の大勝利になった。ところが家康は、あんまりよい顔をしていなかった。せがれの秀忠が、三万の大軍を率いて関ヶ原に到着をする予定だった、九月の十四日、過ぎて六日七日八日、戦は十五日だったんだが、戦が終わって四日経ってよーやく、三万の大軍を連れて秀忠が、「遅くなりました」。関ヶ原へと到着した。

なぜかというと、江戸を三万の礼拝、来発をいたした秀忠が、「行き掛けの駄賃じゃ」石田三成豊臣に功をいたしまして、信州上田のお城で籠城を致しましたのが真田安房守昌幸と、次男の左衛門佐信繁幸村、僅か三千の小勢だ。そこへ、通りかかりました三万の秀忠の大軍が、この、上田の城を攻め落として、幸村親子の御印を戦場へ持っていけば父上も大喜びであろうというので攻め立て始めた。ところが、策を練ったならば、天下一と言われた真田親子でございますので、小勢でありますけど、秀忠軍が攻めては返し攻めては返し、気が付いたなら秀忠軍、ふいっと見れば、もう九月の十五日になっていた。えらいこっちゃということで、慌てて戦場関ヶ原へ。向かって到着した時には九月十九日になっておりました。

「遅くなりました、父上」

「今何時やとおもてる、お前」

と、こういうせがれだったわけだ。このせがれを跡継

ぎにいたしますと、出来の悪いのは可愛いのは間違いないけれど、「我亡き後はこの秀忠が徳川の天下を治めきれるかどうか。それにつけても大坂にはまだ豊臣が残っておる」。七十万石足らずに甘んじていた豊臣秀頼という秀吉公の忘れ形見でございますが、ずんずんと成長をされてもう二十歳になるというときには身の丈六尺有余でございまして立派な右大臣、若大将となりました。

落書というのが立った。『御所柿はひとり熟して落ちにけり木の下にいて拾う秀頼』。落書というのは、無記名、ま、匿名の、歌でございますな。洒落歌、まあ皮肉歌と申します。『御所柿はひとり熟して落ちにけり木の下にいて拾う秀頼』。御所柿というのは、秀忠に将軍を譲ると自らは隠居をします。すなわち社長から会長になったわけだ。このときに、大御所と名乗り始めました。で、御所柿という柿の種類があるんですが、それを家康になぞらえた。『御所柿はひとり熟して落ちるだろう』すなわちもう年いっているので余命いくばくもなく亡くなるだろう。『ひとり落ちにけり』。『木の下にいて』。木下というのは豊臣家の昔の苗字でございます。『木の下にいて拾う秀頼』。拾うというのは『天下を拾う』ということと、秀頼公のご幼名が『お拾』様と申しました。この歌が、世上で広まった。家康は「ううむ。油断がならぬわ。我がまだ生きているうちに、豊臣を根絶やしにしなければならぬわい」

天下に触れをかけました。約50万という大軍が、ワッとばかりに大坂に大坂へと集まって参りましたなかで、大坂城中においても千畳敷の大広間。御ご上段の間には右大臣豊臣秀頼公。御左の座におきましては御母公淀殿。そして大野修理主馬道犬斎城内七手組（注5）と申しまして、青木民部少輔・伊藤丹後守・中島式部少輔・野々村伊代守・速水甲斐守・堀田図書助・真野豊後守といわれるような方々がずらっといなだれたところに、

「後藤又兵衛入城いたしましてござりまする」

「うむ。豪傑の又兵衛が入りくれたか。敵は五十万もの大軍の徳川の手勢である。そなた軍師の大役を務めくれ。秀頼様から直々のご下命でござる」

そのときに、

「ご辞退申し上げまする」

「などてじゃ」

「我よりも適任、一人これあり候」

「誰じゃ」

「関ヶ原の戦今から十四年以前、豊臣方に呼応いたしまして兵を挙げたる中でたったひとつだけ負けなかったところがござりまする。敏い秀頼様でござりま

すから」

「おお、信州上田の真田の親子であるか。今はどこにおるかのう」

「罪一等減ぜられまして死罪になるべきところを、流されまして信州から紀州和歌山、高野の麓の九度山に蟄居してござりますること十ゆう余年。父上はお亡くなりということでござりまするが、その薫陶をすべて受けられたる、ご次男の幸村殿がいらっしゃりまする。幸村様を大坂城へとお呼び入れなさって、軍師の大役をご下命下さりまするよう」

「うむ。ならば幸村をこれへ」

と、言ったんだが、実は幸村という男は紀州という、和歌山の北部に高野山があってその麓に、九度山という集落がある。その中に一軒の屋敷をこさえて親父と一緒に住んでいた。で、奥さんも一緒におったんだが、親父さんが、病を得て亡くなった。で、後を追うようにしてか、幸村の最愛の妻、ゆきえというのも、亡くなった。このゆきえというのが、最愛の妻、道理です。美人の誉高かったそうな。いずれが菖蒲か燕子花。百花繚乱、咲きこぼれんばかりの艶やかさ。立てば芍薬座れば牡丹歩む姿は百合の花。沈魚落雁羞月閉花匂いこぼるる艶姿。中国いうなら楊貴の姫か日本でいえば小野小町か照手の姫か常盤御前か袈裟御前か私の妻かというほどの美人。いや笑うところじゃございません。色の白いことというならば雪か氷か白鷺か。喉仏のあたりを見たならば何か黒いものが付いているから「ん？ほくろか」とおもたらそうではない。あんまり色が白くて透き通っていたものだから、多分今朝食べた黒豆の欠片がね、表から透いて見えるという絶世の美女。このゆきえというのも親父に続いて、亡くなった。

そういたしますると幸村は、蟄居暮らしが長いうえに、柱とも杖ともなる両名を亡くしましたから四十を超えまして、呆けてしまったという噂が、和歌山中に流れた。鼻をたらーっと垂らして裸馬に乗りまするとぽしゃくりー、ぽしゃくりーとその辺りを徘徊するようになった。これを見てとりましたは紀州和歌山の浅野但馬守長晟（のたじまのかみながあきら）と申します。この浅野家と申しますのは、もともとは秀吉の親戚筋にあたる家なんだけれども、世の流れでございますね、徳川になびいたわけだ。そして徳川家康から、

「浅野、お前は幸村親子のところを見張っておけ」

十数年の間幸村親子をじっと見張っていた。すると親父が亡くなって女房が亡くなって幸村が鼻たらんになった。「もう大丈夫だ！」というので浅野長晟はねえ、喜び勇んで大御所家康のところへ面会に参りますと、

「もう真田は見張らなくても大事ないと思いまする」

「何故だ」
「へえ。実は、親父が亡くなりまして、そして女房が亡くなった。その後に幸村という男が、阿呆になってございます」
「幸村が阿呆になった。幸村が阿呆になったか」
ブルッと震えた家康だ。幸村というのは親父の薫陶をずっと受け続けてきた男。これが二人の死を受けて阿呆になった。フリかもしらん。フリかもしらん。阿呆のフリかもしらんと老練な家康はこのとき震えてね。
「但馬、幸村を見張れ！」
「ははーっ」
ところが浅野但馬にしましたら「なんで阿保を見張らんならん。ワシも忙しい」と、いうので家来の者たちを、一応は見張りに立てておったんだけれども油断が出ておった。しかし家来は見張りに立てている。
これを大坂城内の秀頼様がお聞きになりまして、
「浅野の手勢が幸村を見張っているか。うーむ、どうしたものか」
すると幸村の屋敷、一人の家来、「小助参りました」穴山小助という男。
「見張りは浅野はやはり多いか」
「多ございまする。して、大坂城中より、こちらへと使者を出したいという話だそうでございまするが、見張りが多ございまするのでなかなかもって秀頼様の使者が、幸村様のところまで、到着せぬということだそうでございまする」
「なるほど、ならば小助、触れを出せ」
と、手紙を一本、穴山小助に与えます。この手紙というのは、「亡くなった父上とわが女房の三回忌の取りこしの法要を行うので、全国の貧しいものたちよ施餓鬼をしてつかわすのでこの九度山の幸村の屋敷まで参れ。米一升つかわすものなり」という触れを出した。
さあ米ただで貰えると聞いたものですからねえ、大坂あたりはもう、「働かんでも米貰えんねや」というような人間がわんさかおりますんでわしも行く、わしも行く。皆が汚い恰好をした者たちが、どんどん幸村の屋敷へ、幸村の屋敷へとやってくる。
乞食という、まあ言い方は悪うございまするが、乞食という者たちに施しをしてやると幸村が触れを出した。浅野の家来たちが「ああ臭いなあ、ああ臭いなあ。はああ妙なことを幸村の阿呆が始めやがった。何を施餓鬼するというのだ。ええい、臭い連中がいっぱい来やがった」
これを大坂城中の秀頼様がお知りになりますと「なるほど、ならば身なり貧しき乞食（こつじき）の体（てい）にした者を使者

に送ればよいわけかのう。幸村やりおるわい。家来をこれへと集めよ」家来が千畳敷に集められまする と秀頼様がじぃっとご覧になって、明石全登（注6）殿。これは元は岡山、備前岡山浮竹の家老を務めていた男で、敬謙なクリスチャンでございます。

「明石全登、そなたが使者に立て」

「わたくしが使者でござりまするか、もっと適任がおると思いまするけれども」

「お前しかおらぬぞ。この秀頼、お前しかおらぬと見た」

すると皆が、「いかにもそうだ、明石殿しかおらん、明石殿が適任だ、いや明石が最高だ」なんていうことを言う。どうして明石が選ばれたかと申しますと、明石が一番、乞食の格好が似合うという話だったそうでございます。

「嫌んなってきたな俺は」と、そのまんま乞食（こつじき）の格好をさせられまして、ひょこたんひょこたんひょこたんひょこたんと、紀州の九度山へとやって参りまする と、見張りの者たちが「ええい臭い臭い行け行け」明石はそのまま通されます。ご報謝お願いいたしまする と声をかけまする と、お通りー、ぎいぃと木戸口が開いて中へと入れられまする と穴山小助が「ようこそお越し、どうぞ我が殿がお待ちでござりまする。縁側の所にどっかとお座りになっているのが、真田左衛門佐幸村公でござりまする」。

阿呆どころの騒ぎじゃない。

「かような触れを出したなれば、おそらくは乞食（こつじき）の体（てい）になってこの屋敷へと来て下さるだろう使者が。城中には万余の方々がおられるがやはり、明石殿がお越しでござったか」

「それどういう意味でございますか。どういう意味で」

「いや、他意はござらぬ」

「秀頼様の書状これにござる」

「うん。十月、十月（とおげつ）二十四日に入城をいたすものでござりまするぞ」

「ははー」

その言葉を受け賜りまする と「ご恩赦ありがとうござりまする」と、米一升貰いまして、またひょこたんひょこたんと戻って参りまする と、早いもので、その二十四日ということに、なった。

もう何が早いこれが早いといって、講談ほど早いものは無いんでございます。これ（注7）を叩けばもう二十四日になるんですね。その日は朝から裸うん——裸馬に乗りました幸村が鼻をたらぁっと垂らしまして、浅野の見張りの所へ、ぽしゃくりぃぽしゃくりぃと。

「可哀想にね。天才軍師のご子息、ご子息はお父様よりも天才だという評判でございましたがなあ。お父さんが亡くなって、そして奥さんが亡くなったら、あんな風に阿呆になってしまうもんでございますかなあ。お山の馬鹿大将何処へお行きになりますか」
「ああ、お仕事ご苦労様。蜷川角兵衛の所へ碁を打ちに参る」
「ああ、角兵衛も難儀なこっちゃなあ。見込まれてしもうたなあ。いってらっしゃいまし」
「いってくるぅ」
と言いながら。
この広野の麓の所に醤油問屋でありました、蜷川角兵衛という商人がおった。ここへ暇があったら、随時出かけて行っては碁を打っていた、ところが。
今日二十四日というのは紀州の海際の岩佐という所から、醤油が入ってくるというので朝からもう、てんやわんやの大忙しでございます、ところへ。
「ええ旦那様」
「なんだ、丁稚、忙しいねや」
「えー、アホがやって来ました」
「この忙しい時にアホが来たか、ああ……留守やと言うとけ」
「聞こえてるでぇ、角兵衛」
「ああ耳だけはええんさかいな、もう。いらっしゃい、若先生。どうしましょう」
「碁を打ちに来た」
「えぇ忙しいんですわ、わたくしは。今日は醤油が蔵に入る日でございます」
「今日は幸村も実は忙しい日じゃ」
「嘘つきなはれあんた一生暇でっしゃろ。ほな一盤だけでっせ。何してますのん、あんた弱いねんさかいに黒持たなあかしませんがな。白持ったら、けあいにならん」
「今日は白持つ。先行け」
「先、任してしもうたら、もーおしまいでっせ、ほい」
「おーらしょ」
「ん、ほい」
「おぉーらしょ」
「ふー若先生黙っていれませんか、黙ってできませんか」
「なんか言うてるかなあ、わし。おぉーらしょ」
「鼻から出てます、鼻から。ほらしょほらしょと言うとりますで。難儀なこっちゃ」
と言いながら碁をさしておりまして、ひょいっと、蜷川角兵衛が盤面を見て、えっと驚いた。いつもならばすぐに幸村は負けてしまうんだけれども、今日気が

ついたら、

「これわしの死んでるがな。ここも死んどる。ここも負けてしもうてる。へえっ、若旦那、若先生、あんた今朝何食べてきました」

「ええ、今朝は朝ご飯」

「そりゃ普通やがな。ええ、これ負けてしまいましたがな。えらいこっちゃなあ、へええぇ」

感心しておりましたる所、番頭が、

「旦那、大変でございます。和歌山の浅野の手勢がおおよそ五千名。『九度山の真田幸村様を襲うのだ。妖しの動きをしている』というので大軍で向かってきているそうでございます」

「なんじゃて？　浅野の大軍が。幸村様、こんなとこにおったらあかしませんで。屋敷に戻らな」

「屋敷へ戻ったら、屋敷が狙われとるさかい、わし危ない。ここがええ」

「いやここにおったらうちが狙われますがな。うちが狙われます」

「勝負はまだついとらん。さあ、行きなさい」

「ええい、な……うち来るなあ絶対に。幸村がここへ来たというのは浅野の見張りの人は知ってるはずやさかいに。うちへ来るよってに、早いことせんならん。こんな碁打っとる場合と違いますがな。……んな、こないしまひょう。あんたが勝ってあたしが負けたら、もうそんでよろしいんですな。もうどっちみち、こりゃもう勝負、あての負けみたいなもんですんが、ええい！」

と盤上の黒と石の（注8）、ぐしゃぐしゃにしてしまう。にっこりと笑った幸村が、

「角兵衛、この幸村が勝ちでそなたが負けか」

「ええ、あての負けだ。もうここも襲われたら困りますよってに、早いとこどこか山の奥にでも逃げておくんなはれ。お願いいたしますわ」

「勝ちか、角兵衛」

「へっ？」

「戦の門出（かどで）で勝つというのは縁起がよいものじゃ。大仁坊（注9）、支度に及べ！」「ははーっ！」と声がしたのが庭の端にある蔵の中。

「蔵ん中から声がしたで？　あかへんでそこ醤油入るとこやで誰が住んでんねん」

するとガラガラガラガラガラガラガラ……と、戸が開いたかと思いますると鎧兜姿の六尺猶予の駒がたりの大仁坊という、信州上田以来の古兵（ふるつわもの）がガッチャリガッチャリガッチャリガッチャリ……

「ああ、あんな所から出てきた」

すると後ろから、信州の手勢の者たちおおよそ百名

ばかりがずらっと倉の中から出て参りました。
「いや、そこ醤油入れる所やと言うてますやのに。困った人らやなあ」
そのうちの二人がパラパラパラパラッと走って参りますると、「御免」と言いながらシュッと土足のまんま、縁側に上がりますと、黒白の乱れた石をスーッと全部のけてしまう。
無言のうちに幸村がそこへどっかと腰を下ろしますると、一人は後ろへ回りまして、兜をかぶりやすいような髷にしつらえる。今一人は陣羽織をば羽織らせて鎧もののごというのを素早く付けさした。
縁側で仁王立ちになった姿を見て蜷川角兵衛が、
「あああ！　……あんた阿呆と違いましたな。阿呆治りましたか」
「角兵衛、今が今まで阿呆の振りをしていたのは徳川を欺くためであった。角兵衛も欺かねばならなかった、許せよ。……碁の勝負は、いずれまた。第二坊、駒敷け！」
と言うと「はっ！」と答えて駒をば敷いて参りましたのが、裸馬ならぬ昨日に代わる今日の葦毛の陸奥だちの名馬それにひらりパッと打ち跨ったかと思いますると日月の軍扇というのを胸ぐんから一つ取り出しましてスーッと采配ふったかと思いますると、荒野の山や谷の所からゴンーゴンーゴンーゴンーゴンゴンゴンゴンゴンゴンゴンゴンー……鐘が響いたと同時に、ヒュルルルルル……紺碧の蒼い蒼い空においてパーン！狼煙がはぜったかと思いますると、ンンンーーンンンーーー……ホラ貝の音がねぼとに聞こえてきたかと思いますると、ヴィヴィーィィィーーー……鬨の声があなたかなたから聞こえてきたかと思いまするとあっという間に蜷川角兵衛の広い庭前に六文銭六連銭の旗をば背中につけましたる信州上田以来の古兵たちが五人十人五十人百人二百人集まってきたかと思いまするとざっと整列をいたしましたるところへさして「一同よく集まれり」にっこり笑って大喝いたり。大声出しました幸村が、「これより、大坂城へと入城いたすものである。我にと続けェーーー！」
ピシャリと一鞭入れたかと思いまするとパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパン！　幸村公その日の出で立ちを見てあれば右の大袖は赤糸、左の大袖は白糸源平威毛の大鎧を一着なし。御名絓糸五枚綴青龍の前立てなしたる兜をががとのごしょに押し頂かれ、白羅紗金には錦糸を持って五三の桐の紋高縫いなしたる陣羽織は恐れ多くも豊太閤秀吉公拝領の品と相見えた。これを肩より投げかけ投げかけはいようごうー。

今しも蜷川角兵衛の庭を出ようとするその時にシュエーーー！　兜は被らずそのまま緑艶なす髪を後ろへ風にと流して駒を飛ばして参りましたるのが先の信州小県郡上田の主真田左衛門佐信繁幸村が嫡男大助ゆきやす（注19）当年十六歳。

「父上！　まんまと浅野の手勢はもぬけの殻になっておりまする我が真田の邸へとなだれ込んだる所、洞煉瓦なる真田の地雷で木っ端にぶち抜かれたのでござりまする」

「せがれよくやった。戦の門出碁にも勝ち、浅野にも計略まんまと当たったわい。戦、勝つ！戦、勝つー！」

えいえいえいおうおうおう、えいえいえいおうおうおう。えいえ声を出しながらそのまま堂々と大坂城へと入城をいたしまする。

「真田が来たぞ。真田が来たぞ」

「真田真田と言った所で十四、五年もの間蟄居暮らしだ。世間のことは分かろうまい」

大坂城の中におりました古い家来たちはちょっと馬鹿にしていたところがあったのだ。ところが真田幸村が満座の中でへえへえへえ。

「幸村、待っていたぞよ。軍師としてどのような采配をふるう。」

「ははあ。まずは秀吉様がお造りになりました大坂城を逐一拝見。」

大坂城の中をずーっと巡っていく。するとね、大坂城の西側にひときわ大きな石が、埋め込まれていた。

「この石」と言いながら触る。家来の者たちにこの石をどけるように。すると五、六人でこれをぐーっと外すとね、穴がシューー……。中へ家来の者が入ります縦横無尽に、現在の大阪市の地下の所に穴がスーっと通っている。

これを後に大阪市営地下鉄が利用したと言われてるそうでございますがね。あ、他所で言わない方が良いと思いますよ。

これぞ真田の抜け穴と申しまして、かの秀吉という方が後々、豊臣軍のために役に立つであろうというので抜け穴をあらかじめ造ってくれていたわけでございます。そして天守閣に上りまして、四方をずーっと眺めた時に、南側。

「ここが弱点でございまする。ここに半円状の出丸をこさえ上げて『真田丸』と名付くるものにございます。おそらく大御所徳川家康も南側が弱点とすぐに悟ってここから大群で攻めてくるに相違ございませんから幸村一番出丸で前線に張り付いてございます」

「幸村が来てよかったな」

一方大御所家康は、「浅野が油断をしやがって。阿呆

になっていたのは振りに相違無しと言うたであろう。大坂城に幸村が入城したわい。よし、油断をするな」。徳川家康大御所は旗本の家来たちをぐるっと周りに固めさして、大坂城の南側、約二里ばかり離れた所に住吉大社というお社がございます。ここを本陣にいたしました。ところが幸村が入城して出丸をこさえたという。だから家康はね、「何か策略があるに違いない。何か計略があるぞ。だから油断するな。待て。おれの触れが出るまで勝手に戦をし始めてはならぬ」。戦止めが出た。ところが遠い所は九州からも出張ってきているし、奥州の伊達政宗なんぞは二万五千六百四十二名と猫三匹で出陣してきておりまする。

その朝な夕なの飯をずっと食わせんならん、戦がないにも関わらず。しびれ切らした独眼竜の正宗が、住吉大社にやって来ると、

「大御所殿」

「おお、正宗殿か。いかがした」

「いかがではござりませぬ。戦はいつになったら始まりましょうか。手柄挙げ放題というので皆は逸っておりましたけれども、もう冬になりまする。早くに帰りませんと。故国は雪まみれになってしまいまする。もし戦が、数日中に行われないのでありましたなれば我らは、手勢を引き上げまするぞ」

「まあまあまままま、待て待て待て待て待て。相手の軍師が幸村なのじゃ。……んあぁこうする。家来の者達はもう、わしゃあ、信用できぬ。この家康自らが陣回りをしていって、どこが一番攻めやすいかというのを、この目で確かめる。歴戦のつわものというのはこのわしじゃあ」

翌日だ。家康が住吉大社から、ずーっと出かけて行く。ところが真田の出丸の中におきましては、穴山小助が、

「どうやら忍びの者の話によりますと、家康が家来から突かれまして、陣回りに出るそうにござります」

「そうか、いよいよ出るか。……ならば船を用意しろ」

「はっ」

大坂城の、北側の所、川が流れております所へ、小さな細ーいバッテラのような、岬船という、これをば浮かべますと、穴山小助と幸村が、……このバッテーラという岬船はね、自力で、この、こう、カラカラカラカラカラカラーっと、この、自転車のペダルを漕ぐようにいたしますと、こっちのペダルがパラパラパラパラパラパラーっと回って、自力で、動けたそうでございます。……穴山小助がすーっと、大坂城からすうーっと南へ南へ、んで現在のあの、道頓堀と言いましてね、盛んな、あの賑やかな繁華街があるんです

が、あの道頓堀から今度また南側へずうーっと下りていく。しばらく下りて行きますと、細い細い、溝みたいになりました。

「幸村様、これ以上進むことはできませんが」

「ちょうどこのあたりでよろしかろう」

と言って、ヨシ、アシをかき分けて、小高き所へと主従二名が登って行くと、朝靄の中、天照皇大神号旗、金の五本骨招き扇の大馬印をつけまして、駒に跨がる徳川家康三つ葉葵の紋所が朝日にきらりきらりと輝いているのが、遠目で分かる。

「これを、撃つのでございますな、幸村様」

「いかにも。真田以来の、火縄いらずの短筒というのがある。これでもって、狙うてやる」

タアーンッ……撃とうとしたんだけどもその直前、幸村が、

「やめた」

「え、どうしてでございますか。んんっ、家康は一番目の前に今、おりまするが」

「あれは家康ではないな、小助」

「などて分かりますか。……家康ではござらんか」

「あれは年のもっと若い男が馬に乗っていると見た。家康は今年七十三だ。もっと年寄りの乗り方をするに違いない。あらぬものを撃っては、意味がない。帰ろう」

幸村も名人なら、家康というのも抜かりがないというか、用心深いと言いますかねえ。住吉大社を出発したんだ。ところが朝風にぶえやぁーっと煽られて、足軽が持っておりました神号旗という神様の号がしたためられてございます旗が、ボキィっと中程で折れたんだ。家来の南光坊天海という坊主が、

「神様の号旗が折れるというのは、不吉極まりのうございまする。今日の陣回りは、お見合わせあるべきかと……」

「黙れえ、天海。正宗に尻を突っつかれてのう。今日の陣回りもやめるとなったなれば、他の者達もこぞって故国へ戻ってしまうわい」

「では誰か、名代をお立てくださりまし」

「誰か余の名代になる者はおらんか」

「はっ、米倉和泉が代わりに立ちまする」

旗本の米倉和泉という四十一歳の男が、家康の鎧兜、陣羽織をつけまして、馬に乗っていた。これを、図らずも幸村が撃とうとしたときに気がついたと言われてございますねえ。

穴山小助がねえ、「そうでございますかあ。しかし私はまだその、鉄砲というのを撃ったことがございません。幸村様、たぶん当たらんと思いますんで、ちょっと私に一発、あの、撃たしてもらえんでしょうか。貸

してくださいまし。いやあ撃ったことがないからねえ、当たらないと思うんですよ」パアーンッ、ズキュ、ドーン。米倉和泉というのはここで死んだそうです。

これを聞いて家康はぶるぶるっと震えた。よくぞ旗が折れてくれたことだと。これは家康と信長の違いとも言われてます。信長が実は、一番最初に申しました明智光秀にやられてしまうという本能寺へ行きますときに、講談ではねえ、ちょうど琵琶の湖畔を歩いておりますときに、あ、馬に乗って行くときに、一陣の琵琶の風が吹きまして、信長が被っておりました陣笠がピャーっと吹き飛ばされた。ほんで馬の前に落ちた。で馬がこれを、踏んづけた。家来の者がねえ、

「不吉でござりまする。お戻りを」

「たわけぇっ。人が踏んだならば、意志はあると思うが畜生じゃ。畜生が踏んだから縁起が悪いとなればどこへも行けんわぁっ」

そのまんまずーっと本能寺へ向かった。だから命を落としたんだ、などと言われるそうでございますねえ。家康はこれで一旦戻りましたけれども、「いやしかし、わしが行かんということには、こりゃあ始まらんわい」。

翌日でございます。まだ夜が明ける前、今度は始めから家康の格好をせずに、家来の本田上野介の格好をいたしまして、葵の紋でも本田の御紋は立葵、立の葵の紋所背(せな)につけました旗、これをばつけまして駒に跨がりそのまま、家来も全員本田の立葵をつける。実は徳川の御本家の家康の家来旗本連中なんだがねえっ。そのまま北へ北へと。「おおー、ばれずに来たわ。あれが大坂城か。ならやっぱり南側から攻めるが良いか。あの出丸の所に幸村めが入りやがったかあ。しかしこちらは大群じゃっ、はははっはっはっはっはっ」

その笑い声が、終わらぬか、終わるか、というそのときに、横手のヨシ、アシがガサッ、ガサッ……揺らめいた。馬上の家康、ひょいっと何気に見たときに、さっと左右に泣きわかれた。ずっとそれへ出て参りました男と申しますのが、真っ黒頭巾、覆面をしておりまして人数おおよそ一百名ばかり、手には長柄の槍を持っておりまする正面の男は六尺近く。

「やあやあ、それに参られたるは徳川大御所公と見たるは僻目か。我こそは真田左衛門佐信繁幸村げんざぁーんっ」

「うわぁ、幸村が、幸村がここに待ち伏せをしていたか」

駒の頭を帰したがと思いますると、家来達をほったらかしにしてしまって家康は単騎、パッパッパッパッパッパッパアーッと逃げ出した。すると目の前のヨシ、

アシん所がガサッ、ガサと揺れたかと思うと、あれっと思うその間もなくさっと泣きわかれになったなったかと思うと、それへ真っ黒頭巾の人数おおよそ一百名ばかりがずい、と出て参りますと正面の六尺有余の男が、

「やあやあよっくここへと参られた。白髪の首をば頂戴いたさん、我こそは真田幸村見参見参」

「えっと、幸村があっちにおって、こっちにまた幸村がおって……幸村が二人出たか！」

駒を右手に返して逃げようとすると、右ん所からも。

「やあやあ我こそは真田幸村なり」

反対へ行こうとすると。

「やあやあ我は幸村なり」

「幸村いったい何人おるんじゃわい」

と、そのまま馬を飛ばして行こうとしたときに、馬がねえ、「もうあきまへん。もうあっちゃへ行ったり、こっちゃへ行ったりさせられて、もう、あきまへんでえ。もう、あかん」と言うとどさっと倒れてしまう。「お、これっ、これっ」と耳に向って大声を出しましたけれども、もう馬は生き返らなかった。馬の耳にお陀仏というのはここでございますねえ。

そのまま家康はしょうがないから七十過ぎた、右の足と左の足を互い違いに出しながらね、いや当たり前ですがね、てぇーんと逃げようとする後ろから正真正銘、右の大袖左の大袖が源平威毛になりました、真田左衛門佐信繁幸村が、名馬に跨り長柄の槍を持っておそらく大御所家康公はこの辺り、家康公の乗っておられた馬がここにおるということは、おそらくは徒歩（かち）にてどこかへ逃げたが年寄りのことさほど遠くまで逃げられるはずもなし。お、見ればヨシ、アシがだんだんだんゆっくり動いていくところが見えたから、ここまで近づいて参りまして、え、しゅっ。槍を突き下ろした。この槍が家康にずばあっと突き刺さろうかとするそのとき早くかのとき遅く、まあそう言うたらどっちが早いのか遅いのか分かりませんが、横合いから家来の大久保彦左衛門というのが家康を「大御所様！」と言ってガッと、馬手（めて）と言って右手で抱え込んだかと思うと、タァーっと横手へ逃げた。家康はこんな（注1）男だったそうなんですがね、これをクワッと小脇に抱え込んでビャッと逃げるなんていうところが大久保彦左衛門のこの、よく逸話が残っているんだ。

ところが大久保彦左衛門がシェイッと横手へ逃げたもんだから幸村の槍がスッと宙を。「おおっ？確かにいたはずなんだ、が」。すると横合いでザブンという音がした。と、申しますのは大久保が「よいしゃあ！」と幸村――ああ家康を抱え上げて隣横へ逃げようとし

たんだけど横手にね、大きな木の根っこがあったんだが根っこの真ん中が朽ち果ててそこに水が溜まっていた。季節はちょうど今時分でございます。ちめたいちめたい水。その水のところに大御所家康と大久保彦左衛門がズバアァァッと入り込んだ。で家康がぷるるるるるっ。

「ひこざ、寒い！」

「だまらっしゃい」

と言って口を押えた。ところが口を押さえたくらいではもうこの寒さは収まるものじゃないので家康は鼻でもって「んーんーん、んん！」。鼻をんっと押さえてもう息がでけんようにする。

すると幸村は水音が聞こえたものだから「この辺りだな」。根っこをつけてズッ。一突き目の槍が大久保彦左衛門の鎧をシュッと掠る。「手ごたえあり」。いまひとつシュッ、また掠る。これがみっつ掠ったと申しますね。

「少し変えて」と、これをツェイと突いていたなら家康は心の臓を突かれてもうお陀仏ということなんだけれど、今しも突こうとする四つ目！　後ろから「大御所様ー！」。旗本連中（はたもとれんじゅう）おおよそ五百名ばかりが幸村は単騎、すなわちただ一人のところへ「家康様の命心許なし」というので攻め上がって参ります。幸村は「しまった。運の強い大御所殿である。また戦場でお会いいたそう」とその洞の中にいる声をかけますと、頭を帰してパッパッパッパッと逃れていく。

家康はぷるるるるるる「ようよう助かったわい。さりながら幸村が入城をしたというのは油断ができぬぞ」。

その通りで冬の陣というのは幸村の大活躍で持ちまして家康はもう敗戦続き。そして朝廷を脅かして和睦をする。で和睦の時にお城を裸城にして全部堀を埋めてしまったのでございます。で夏の陣になりますともう裸城だから出丸もございませんので籠城することができないから戦場に出て戦わねばならぬ。すると豊臣方は小勢で徳川方は大群だから、飛んで火に入るなんとやらという戦になる！

しかし軍師の幸村が影武者をたくさん用意してございまして最後、大坂の堺というところで徳川家康（にっ）がおったところを、副軍師の後藤又兵衛という人に、日本号（ぽん）の槍でもって家康をズバアァッと突き殺すという物語の結末が大坂方の難波戦記という大坂冬の陣夏の陣の物語になっているわけでございますねえ。

江戸時代はこれはおおっぴらにお話をすることがはばかられたと聞いてございますね。ですからアングラでございますか。地下で物語をこうお喋りしたと言わ

れているわけでございます。しかしこういう話を聞きますと、大阪の人が「ああ、胸がスカッとする」「何が江戸じゃ、何が東京じゃ」というような感じでございますな。アンチ何とか、という。だから阪神タイガースがいつもジャイアンツに負けるような感じですね。「くそう、あのジャイアンツめ」というその思いが、たぶんこんな物語を作り上げたのではないかとも思うわけでございますね。

まあ家康バーサス幸村の話はまだまだ続くわけでございますが、ちょうど持ち時間が来たようでございますので、この辺りに留めおきとうぞんじます。どうもご清聴ありがとうございました。

※講談「大坂の陣〜幸村VS家康」活字化担当者は以下の通り。

―みやした・じゅんこ　日本文学科四年生―
―わたなべ・ともみ　日本文学科四年生―
―しばた・すえかつ　日本文学科三年生―
―のなか・しょう　日本文学科三年生―
―すずき・まほ　日本文学科二年生―
―すなはら・ありさ　日本文学科二年生―
―うとたに・こうすけ　日本文学科一年生―
―おさき・ともや　日本文学科一年生―

注釈リスト

注1【行てもしませんのに三年もの間ね、「城崎温泉日帰りしておりました。」何て言うようなどっかの議員の先生】
二〇一四年に起きた兵庫県議会議員の、政務活動費不正支出事件のこと。

注2【テラシマ先生】
原語ママ。寺杣（てらそま）先生が正しい。

注3【総選挙】
二〇一四年一二月十四日の第四十七回衆議院議員総選挙のこと。

注4【てんが七部が通】
七道。東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道のことか？

注5【七手組】
速水守久・青木一重・伊藤長実・堀田盛高・中島氏種・真野助宗・野々村幸成・松浦秀任の七人。

注6【明石全登】
本名は明石掃部（かもん）。

注7【これ】
張扇のこと。

注8【黒と石の】
原語ママ。黒と白の石を？

注9【大仁坊】

駒ヶ岳大仁坊。真田十勇士のひとり。

注10【大助ゆきやす】

真田幸村の長男は真田幸昌。「ゆきやす」ではなく、「ゆきまさ」か。

注11【こんな】

両手で大きさを示した。